# 植民地時代後期ペルー・モケグア地域産アグアルディエンテ（ぶどう酒の蒸留酒）の流通をめぐって

## －ブルボン改革との関係で－

真　鍋　周　三

### はじめに

ポトシ銀山の銀生産の絶頂期であった1603年のポトシ市場における食糧品消費の記録が残されている。各食糧品を年間売上額が大きかった方から順に挙げるならば、第１位が小麦粉〔9.1万ファネガ（fanega.「ファネガ」は容量の単位。１ファネガ＝55.5リットル）〕（164万ペソ）、第２位がチチャ酒〔160万ボティハ（botija.「ボティハ」は「素焼きの壺」で酒類などの分量を示す単位。１ボティハは８リットル）〕（102万ペソ）、第３位がぶどう酒（５万ボティハ）（50万ペソ）であり、これにコカ（６万かご）（36万ペソ）、トウモロコシ（5.6万ファネガ）（28万ペソ）、ジャガイモ（４万ファネガ）（12万ペソ）・チューニョ（chuño. 凍結乾燥させたジャガイモの保存食）（２万ファネガ）（12万ペソ）・オカ（oca.南米産カタバミの一種）（４万ファネガ）（12万ペソ）（ジャガイモ、チューニョ、オカの売上額は同じ）、果物（11万ペソ）が続く[1]。このうち太平洋沿岸部（からアンデス西部斜面にかけての）一帯からの供給品の中で、ポトシ市場で好評だったのがぶどう酒である。ぶどう酒は小麦と同様、征服以降にスペイン人が持ち込んだものであり、以来、太平洋沿岸の温暖な渓谷地帯で作られるようになった。とくに現ペルー南部と現チリ北部の渓谷地帯においてブドウ栽培とぶどう酒醸造業が発達した。太平洋岸からポトシへ年間２万5000頭のリャマに積まれてぶどう酒が輸送された。１頭のリャマが運びえた分量は２ボティハであった。ポトシまでの距離150レグア（legua.距離の単位。１レグアは約5.6㎞）（約840キロ）を踏破するのに３か月を要し、同行した原住民に支払われた報酬は１人当たり５ペソであった〔この骨の折れる仕事に従事したのはすべて原住民。輸送にあたって１人の原住民アリエロ（arriero.役畜の御者）が管理しえたリャマの頭数は25頭まで〕。最盛期のポトシ市場ではぶどう酒が大量に消費されたが、その大半がアレキパ地方（Provincia de Arequipa）やモケグア地方（Provincia de Moquegua）から供給されていた。これらの地方の白人のエンコメンデーロ（encomendero）やアセンダード（hacendado.農園主）、商人がぶどう酒の生産ならびに販売

[1] 拙稿「植民地時代前半期のポトシ銀山をめぐる社会経済史研究―ポトシ市場経済圏の形成（前編）」『京都ラテンアメリカ研究所紀要』No.11、京都外国語大学、2011年、71頁。

第１表　1779～1802年、モケグア地域産アグアルディエンテの10の主要受け入れ先

| 10の主要受け入れ先：都市 | 分量（単位：キンタル） | 全体に占める割合（単位：％） |
|---|---|---|
| ポトシ | 119,638 | 39.77 |
| ラパス | 101,677 | 33.80 |
| オルロ | 52,095 | 17.32 |
| コチャバンバ | 7,119 | 2.37 |
| カラコト | 5,083 | 1.69 |
| タクナ | 4,135 | 1.37 |
| プーノ | 3,823 | 1.27 |
| コパカバーナ | 3,134 | 1.04 |
| セピタ | 2,467 | 0.82 |
| ユングヨ | 1,637 | 0.54 |
| 合計 | 300,813 | 100:00 |

出所：Alicia Polvarini de Reyes, “Mercado interno y región Moquegua y las rutas del aguardiente de uva en los siglos XVIII y XIX.” en *Historia compartidas economía, sociedad y poder, siglos XVI-XX* por editores de Margarita Guerra Martiniere y otros(Lima:Pontificia Universidad Católica del Perú, Instituto Riva-Agüero,2007),pp.466-467.

に携わった[2]。しかしやがてアルティプラノの原住民、とくにチュクィート地方（Provincia de Chucuito）の原住民が介在して、この太平洋沿岸地方でつくられたぶどう酒をポトシに輸送・販売し、報酬を得るケースが頻繁になった。ミゲル・グラーベはぶどう酒輸送業者（trajín/trajinante de vinos）の事例を紹介し、「ぶどう酒の道（ruta del vino）」によってモケグアとチュクィート地方のフリ（Juli）、ポマタ（Pomata）、セピタ（Zepita）が結ばれていたことやポトシへのぶどう酒輸送の実態を明らかにしている[3]

18世紀以降、ぶどう酒の蒸留酒であるアグアルディエンテ（aguardiente de uva）の商品価値が高まり、それはもっぱら中央アンデス南部高地（以下、「シエラ南部（sierra sur）」と略称する）に運ばれるようになった。アグアルディエンテの最大の生産地はモケグア地方であり、シエラ南部におけるアグアルディエンテの最大の消費地は、かつてのぶどう酒と同様ポトシ市であった（第１表参照）[4]。植民地時代末期アルトペルーの商業交易について研究したダニエル・サンタマリアは、1794にペルー副王領内からポトシ市場に送られた商品〔＝現地（地元）産商品（los efectos o productos “de la tierra”）〕中、アグアルディエン

[2] 同拙稿、77頁。/ Luis Miguel Glave, “Trajines,abastecimiento y mercado: Potosí,siglos XVI-XVII.” en *Potosí plata para Europa*, por compilador de Juan Marchena Fernández(Sevilla: Universidad de Sevilla, Fundación El Monte, 2000),p.165.

[3] 詳しくは、*Ibid*.,pp.166-167./その他、Roberto Choque Canqui, “Los caciques aymaras y el comercio en el Alto Perú.” en *La participación indígena en los mercados surandinos, estrategias y reproducción social siglos XVI a XX*, por compiladores de Olivia Harris,Brooke Larson,Enrique Tandeter(La Paz:CERES/SSRC,1987),p.358,p.361. 参照。

[4] 詳しくは、Kendall W. Brown,*Bourbones and Brandy Imperial Reform in Eighteenth- Century Arequipa* (Albuquerque : University of New Mexico Press, 1986),pp.79-83. 参照。

テが群を抜いて１位であったと述べている。すなわちペルーからの全商品の合計額153万8937ペソのうち、アグアルディエンテがなんと114万ペソを占めていたとする。これは全体の74％にあたる。驚嘆に値する規模である[5]。

モケグア地方産の蒸留酒はアルトペルー（Alto Perú.＝チャルカスのアウディエンシア（Audiencia de Charcas）領域。現ボリビアにほぼあたる）のラパス、オルロ、ポトシ、コチャバンバ、そしてリオ・デ・ラ・プラタ副王領の辺境に位置するフフイのような遠方の都市にまでも供給された。当時のある証人は、モケグア谷で生産された蒸留酒４万キンタル（quintal.重量の単位。１キンタルは46kg）が、総数１万3000頭のラバに積まれてさまざまな場所に出荷されていたと証言している[6]。

ブドウ園の運営、ぶどう酒・アグアルディエンテの生産や取引を通じてモケグア地域（付録１の地図参照）の地主や醸造業者、商人は、この地域の支配階級を形成した。その点がイカ（Ica）やピスコ（Pisco）地域（太平洋岸におけるもう一つのぶどう酒の産地）[7]のエリートの場合とは異なる。イカやピスコのエリート階級はもっぱらリマに居住していた。モケグアの地主達は、とくにアルトペルーの傑出した地方商人の家系と早くから結びついていた。イカとモケグアの地方的な違いのもう一つは、労働力にあった。イカのブドウ園がアフリカから連れて来られた黒人奴隷(esclavos africanos)によって営まれたのに比べて、モケグアのそれは、とくに18世紀以降ではもっぱら山岳地帯の原住民労働者（trabajadores serranos）によって維持されたのだった。労働力は小作人や、伝統的な契約による季節労働者ペオン（peón.農業労働者）からなった。彼らが灌漑（el riego）、ブドウの木の手入れ・剪定（la poda de un cierto número de plantas de vid）、収穫に従事した[8]。

ぶどう酒やアグアルディエンテの生産と商業サイクルをみると、さまざまな技術が浮上する。例えば、蒸留のかまど（los hornos de destilación）が堅い薪（la leña dura）を必要としたこと、薪の収集においては原住民農民や共同体の助けを必要としたこと、ぶどう酒

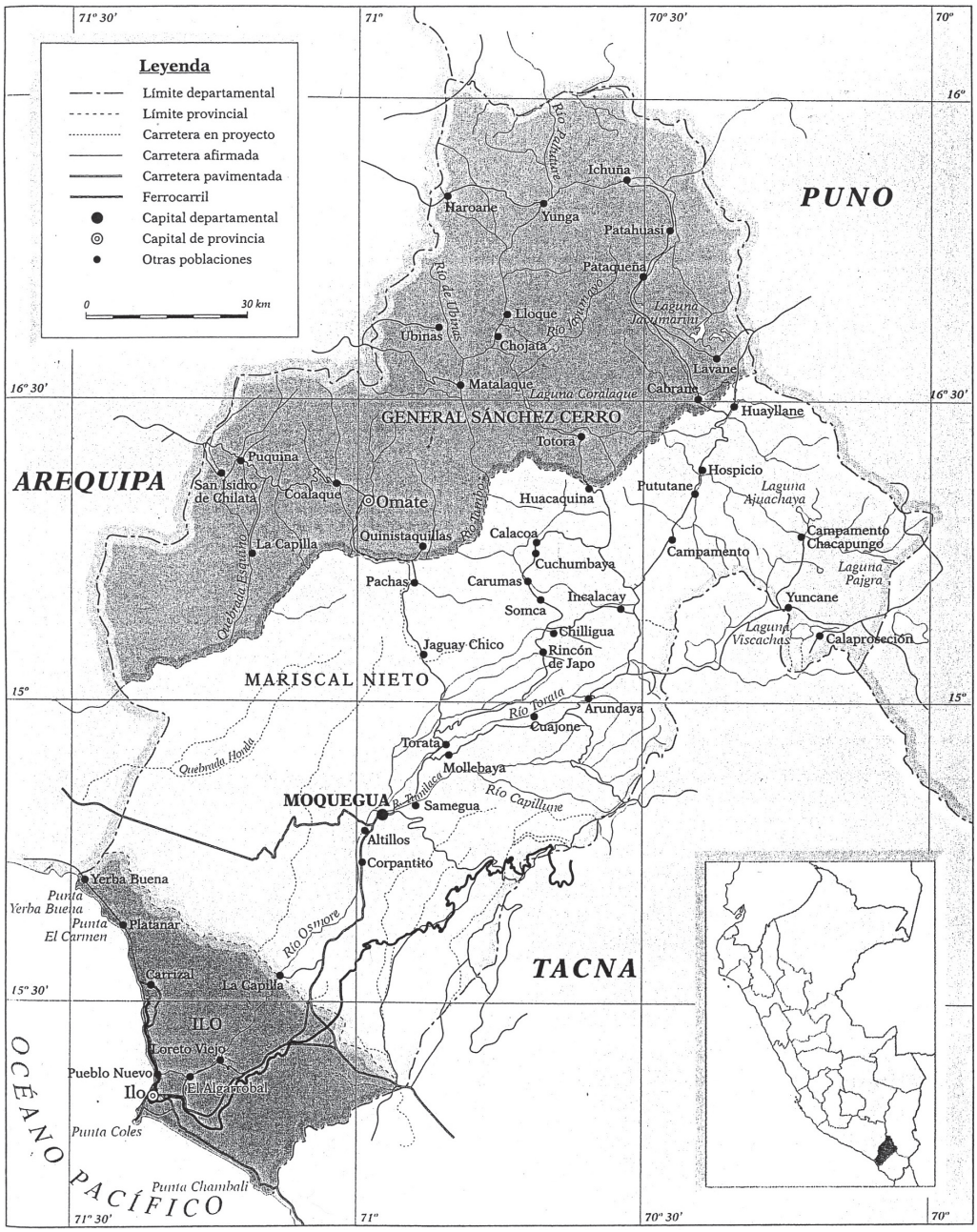
5 Daniel J. Santamaría, “Intercambios comerciales internos en el Alto Perú colonial tardío.” en *Revista Complutense de Historia de América*,Vol.22,1996, p.257./ エンリケ・タンデテールらの研究によると、1793年にポトシに運ばれた現地（地元）産商品の規模はサンタマリアの示した数値と異なっている。だが、アグアルディエンテ（ぶどう酒を含む）が第１位であることに変わりはない。Enrique Tandeter,Wilma Milletich,Ma.Matilde Ollier,Beatriz Ruibal, “El mercado de Potosí a fines del siglo XVIII.” en *La participación indígena en los mercados surandinos,estrategias y reproducción social siglos XVI a XX* por compiladores de Olivia Harris,Brooke Larson,Enrique Tandeter(La Paz:CERES/SSRC,1987),p.396,p.415. 参照。

6 Alicia Polvarini de Reyes, “Mercado interno y región Moquegua y las rutas del aguardiente de uva en los siglos XVIII y XIX.” en *Historia compartidas economía, sociedad y poder, siglos XVI-XX* por editores de Margarita Guerra Martiniere y otros(Lima:Pontificia Universidad Católica del Perú, Instituto Riva-Agüero,2007),p.456.

7 イカやピスコ地域産のぶどう酒はリマやペルー北部、セロ・デ・パスコ鉱業地区に供給された。アルトペルーに流れることはなかった。これに対してアレキパやモケグア産のぶどう酒やアグアルディエンテがリマやペルー北部、セロ・デ・パスコに流れることはなかった。地理的な原因によって両市場の「住み分け」がなされていたのである。Brown(1986),p.77./ Lolenzo Huertas Vallejos, “Introducción al estudio de la producción de vinos y aguardientes en Ica-siglos XVI al XVIII.” *Historia y Cultura*(Revista del Museo Nacional de Historia), No.21,Lima,1991-1992,pp.168-169,p.201,pp.202-204.

8 Polvarini de Reyes,*op.cit.*,pp.457-458.

## 付録１　現ペルー・モケグア県の地図




出所：Departamento de Creación Editorial de Lexus Editores, *Gran enciclopedia del Perú*(Barcelona: Lexus Editores, 1998),p.807.

やアグアルディエンテを容器に入れる必要上、「ボティハ」と呼ばれる素焼きの壺（botijas de greda）を造る必要があったことなどである。それには先スペイン期から継承されてきた陶芸の技術を必要とした。容器はかき回しや移動に耐えうることが要求された。壺の内部に張るのに必要不可欠な防水布は18世紀では現エクアドルのサンタ・エレナ（Santa Elena）から調達された。もしくは、トルヒーリョ司教区・トルヒーリョのインテンデンシア（Intendencia de Trujillo）に位置するタララ（Talara）、マンコラ（Máncora）、カタカオス（Catacaos）、パリニャス（Pariñas）、アモタペ（Amotape）から、または現トゥンベス、ピウラ地方から調達されることもあった。次に、ぶどう酒やアグアルディエンテを輸送するさい、柔軟で軽い容器を必要とした。そのためにイカでは山羊の皮でできた革袋（piel de cabra）が製造・使用されたし、モケグアではとくに羊の革袋（piel de carnero）が使われた。砂漠を越えてアンデス高地に商品を運ぶにはラバが必要とされた。アルトペルーの複数の目的地に向けてモケグアからのラバによる輸送では、１頭当たり３キンタルが３つの革袋に分けられて積まれた。アグアルディエンテ１キンタルの市場価格は８ペソ（ocho pesos fuertes）であった。1777年から蒸留酒製造業者に課せられることになった「新税」の税率は商品価格の「12.5％」であったから、キンタルあたり１ペソの税金が国庫に支払われたことになる[9]。

本稿では、植民地時代後期ペルー副王領の太平洋沿岸部のアレキパ司教区（アレキパのインテンデンシア）に位置し、当地において最大の蒸留酒生産高を記録したモケグア地域を取り上げ、当地産アグアルディエンテの流通について考察する。これまで歴史家は、アンデス地域における食糧品や織物の需要について研究してきた。アグアルディエンテの需要を考えるさい、生産者と消費者間のつながりが重要である。と同時に、ブドウのアシエンダ、醸造所の運営、供給上の問題もまた重要である。イカ地域産の場合との比較を念頭において、モケグア地域産のアグアルディエンテについてみていきたい。

モケグアのブドウ園主は、植民地におけるぶどう酒やアグアルディエンテの生産に関するスペイン王室の干渉によってしばしば挫折を強いられた。こうした状況は新大陸植民地における経済活動をめぐるスペインの法や規則の影響による。ブルボン朝の経済政策や植民地法制度史についてはたくさんの調査がなされてきた。とはいえブルボン改革、とりわけカルロス３世の改革のうちの「行政機構の改革」と「財政政策」という、（後述の如く）矛盾をはらむ諸改革の中でモケグア地域産蒸留酒アグアルディエンテの流通がいかなる影響を受けたのかを中心に考察を進める。

9　*Ibid*.,pp.458-459.「新税」のほかに「アルカバラ（販売税）」も課せられた（後述）。

## Ⅰ　植民地時代後期のモケグア地域

1567年、ティティカカ湖西岸チュクィート地方の巡察文書から、同地方のカリ（Cari）とクシ（Cusi）という２人のカシケ（マユク）（cacique,mallk.原住民共同体の首長）がそれぞれモケグアやサマ（Sama）の谷、トラタ（Torata）の谷にミティマエス（mitimaes）を送り込んでいたことが知られている。カシケはこのミティマエスの原住民から貢納を受け取っていた[10]。ミティマエスは、トウモロコシ、綿、アヒ、コカの栽培に専念しており、これらの産物をシエラの寒冷な高原の産品である家畜（肉）、家畜の毛、堆肥と交換していた。海岸部と山岳部の中間地帯に位置するモケグアとトラタの温暖な谷はチュクィート地方の原住民入植地として形成された。1570年代前半、両渓谷にはチュクィート地方出身のおよそ676人の成年男子（＝貢納納入者）原住民がいたことがわかっている。モケグアやトラタは早くからアルティプラノとの間に密接な関係を築いていたのである[11]。

モケグア地域は、太平洋沿岸部から山岳地帯イチューニャ（Ichuña）の間に広がっている。気候は温暖で乾燥している。植民地時代においてモケグア地域の醸造所（las bodegas）はとくにオスモレ川（別名モケグア川）〔el río Osmore o Moquegua. トラタからモケグア、イロ港北のプエブロ・ヌエボ（Pueblo Nuevo）へと北北東から西方の太平洋に流れる〕流域両岸に分布するアシエンダ内にあった[12]。

### １．ブルボン改革とモケグア地域

ペルー副王領（首都はリマ）におけるブルボン改革（las reformas borbónicas）、とくにカルロス３世（Carlos III,在位1759-1788）の改革（las reformas de　Carlos III）（1763-1787年）は、ラプラタ副王領（Virreinato del Río de La Plata）の新設（1776年。首都はブエノスアイレス）とアルトペルーの新副王領への統合（これによってアルトペルーはペルー副王領から

---

10 Garci Diez de San Miguel,*Visita hecha a la Provincia de Chucuito en el año de 1567*(lima:Casa de la Cultura del Perú,1964),p.14,p.27,pp.125-130.

11 Teresa Cañedo-Argüelles Fábrega (Coord.),*Al sur del margen avatares y límites de una región postergada Moquegua (Perú)*(Madrid: Instituto de Estudios Peruanos, Consejo Superior de Investigaciones Científicas,2004),p.23./ エリアス・ムヒカは、アルティプラノとアンデス西斜面との結合はティワナク時代（el período Tiwanaku.500~1200 d.C.（紀元後）。先インカ期の古代文明期）に遡ると考察した。古代ティワナクの核心地帯に定住していたルパカ（Lupaca.「チュクィート地方」の別称）の人々は、アリカのリュタ谷（el valle de Lluta）からサマやモケグアにいたるまでに入植地（colonia）を持っていた。そうしたオアシスは、以前からティワナクの人々によって占有されており、海岸部の渓谷とアルティプラノの統合メカニズムは、ティワナク時代の入植地を通じてであったとした。Elías Mujica B.,“La integración sur andina durante el período Tiwanaku.”en *La integración surandina cinco siglos después* por compiladores:Xavier Albó,María Inés Arratia,Jorge Hidalgo,Lautaro Núñez,Agustín Llagostera,María Isabel Remy,Bruno Revesz(Cuzco:Centro de Estudios Regionales Andinos“Bartolomé de Las Casas”,1996),p.87,pp.94-95./ ティワナク文化については、関雄二「チリパからティワナクへ」『ボリビアを知るための68章』（真鍋周三編著）（明石書店、2006年）200 － 203頁参照。/ スペイン人によってオスモレ川流域にモケグアの町（la ciudad de San Sebastián de Escapagua, la actual Moquegua. 標高1410メートル）が築かれたのは1540年頃であった。

12 *Ibid*.,p.25./Polvarini de Reyes,*op.cit.*,p.486.

分離した）[13]、アルトペルーからバハペルー（Baja Perú.現ペルーにほぼあたる）への銀輸送の禁止、財政改革（las Reformas Fiscales Borbónicas）：主要都市における王立税関（Real Aduana）の設置、クスコ―ポトシ間の商品流通の禁止、新税（el Nuevo Impuesto）の創出（1777年６月、王室はアグアルディエンテの卸売り価格の12.5％を新たに課税）、アルカバラの値上げ（1776年７月26日付法令の適用。従来の「４％」が「６％」に値上げされた）、自由貿易勅許（Reglamento para el Comercio Libre）の発布（1778年10月12日）、原住民の農産物や従来免税措置がとられてきた現地（地元）産商品など大衆消費財（コカ、トウモロコシ、チューニョ、アヒ、織物等）へのアルカバラ課税、網羅的にして厳格な植民地人口の調査を行ったのち原住民カシケ・メスティソ・ムラート・サンボらへの貢納（tributo.人頭税）の適用などから始まった[14]。トゥパック・アマルの反乱（1780年11月にはじまり、1783年ごろまで続く）後、1784年７月７日にはペルー副王領においてコレヒドール制の廃止とインテンデンテ（intendente、監察官）制の導入が行われた。ペルー副王領はリマ、トルヒーリョ、タルマ、ワンカベリカ、ワマンガ、アレキパ、クスコの７つのインテンデンシア〔intendencia.監察官領。合計52地区（partidos）よりなる。1796年２月１日付でプーノが追加され８つのインテンデンシアとなる〕に分けられた[15]。また現ボリビアにほぼあたるチャルカスのアウディエンシア（ラプラタ副王領のアルトペルー部分）はラパス（La Paz）、サンタクルス・コチャバンバ（Santa Cruz－Cochabamba）、ポトシ（Potosí）、チャルカス〔（＝ラプラタ（Charcas/La Plata））の４つのインテンデンシアからなった（地図１参照）[16]。

行政機構の面でモケグア地域の経緯をみておこう。1784年までモケグア地方（Provincia

---

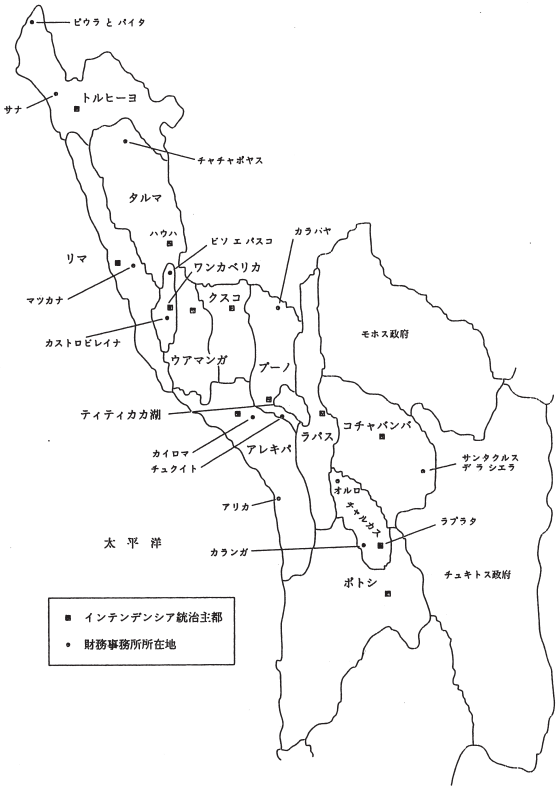
[13] Carlos Lazo García, “Fases de la reforma borbónica.Perú:1728-1800.” en *Obras escogidas de Carlos Laso García Tomo I historia de la economía colonial*(Lima:Fondo Editorial del Pedagógico San Marcos,Instituto de Ciencias y Humanidades,2006),p.179.

[14] José Luis Roca,*Ni con Lima ni con Buenos Aires la formación de un estado nacional en Charcas* (Lima:Instituto Francés de Estudios Andinos/Plural editores,2007),pp.86-99./Scarlett O’Phelan Godoy, “Las reformas fiscales borbónicas y su impacto en la sociedad colonial del Bajo y el Alto Perú.” *Historia y Cultura*(Revista del Museo Nacional de Historia),No.16, Lima, 1983,pp.113-119,p.122,p.125./ 自由貿易勅許によってスペイン、マヨルカ島、カナリア諸島における13港とブエノスアイレスやアリカなど新大陸の24港（このうち太平洋沿岸は５港を占める）が貿易港として正式に開港された。これによって、以後、南米におけるリマの貿易独占は終焉をむかえる。ブエノスアイレスの場合と逆にリマは凋落の一途をたどる。Biblano Torres Ramírez y Javier Ortíz de la Tabla(compiladores),*Reglameno para el Comercio Libre 1778*(Sevilla: Facultad de Filosofía y Letras de la Universidad de Sevilla,Escuela de Estudios Hispano-Americanos-C.S.I.C.,1978),pp.3-4./ 原住民のカシケに貢納が課せられたということは全インディオ成年男子に貢納対象者が拡大されたことを意味する。またオリヒナリオ（originarios. 原住民共同体員）とフォラステーロ（forasteros. 共同体を離脱した浮浪の原住民）間には貢納の徴収額に差額があったものの、貢納税収は大幅に増額したのであった。王室財源としてペルーやアルトペルーに課せられた税金の種類、税率は多岐にわたった。時代の流れに即応して改変されたケースも多い。例えば、ポトシの銀生産においては従来から「５分の１税（quinto real）」が課せられてきたが、1736年には「10分の１税(diezmo real)」に引き下げられた。その他、チャルカスにおける銀生産量と輸出量が1750年代になって好転した事情、ポトシの支配権をめぐるリマとブエノスアイレス間の対立の深まり、ポトシにおけるサン・カルロス銀行（Banco de San Carlos）の設立とその役割や経緯等も興味深い。ハーバート・S・クライン（星野靖子訳）『ボリビアの歴史』（創土社、2011年） 114-120頁参照。

[15] Lazo García,*op.cit.*,pp.174-179.

[16] アルトペルーのインテンデンシアに関しては、Edberto Oscar Acevedo,*Las intendencias altoperuanas en el virreinato del Río de la Plata*(Buenos Aires: Academia Nacional de la Historia,1992),pp.134-155. 参照。

地図１　18世紀後期のペルー副王領とラプラタ副王領・チャルカスのアウディエンシアにおけるインテンデンシア統治区分と主な財務管理地

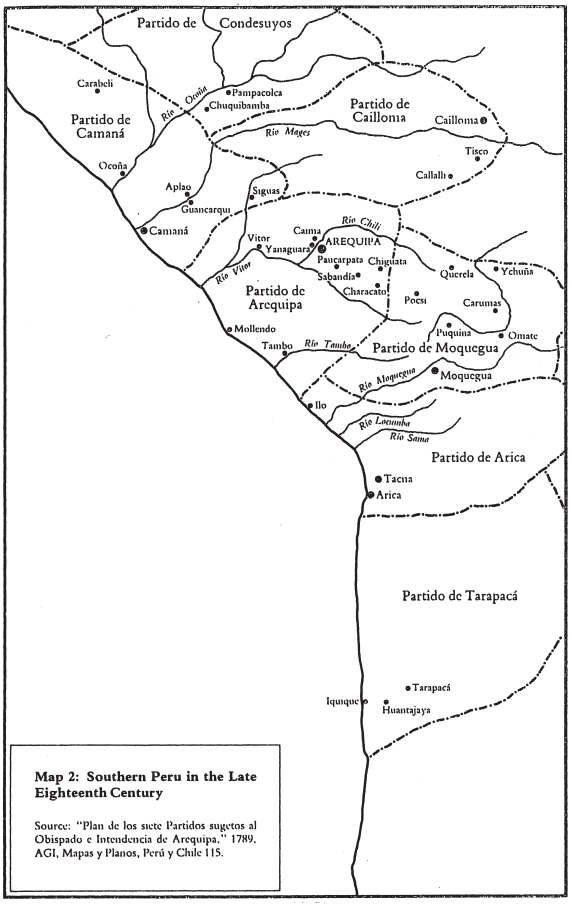



出所：ハーバート・S・クライン著(星野靖子訳)『ボリビアの歴史』(創土社、2011年)132頁。

de Moquegua)〔モケグア地域にコレヒミエント(corregimiento、地方行政官コレヒドールによる支配もしくはその支配領域)が置かれたのは1626年のこと〕はアレキパ司教区(Obispado de Arequipa)[17]に所属する一地方であった〔アレキパ司教区はアレキパ(Arequipa)、カマナ(Camaná)、モケグア、カイリョマ(Cailloma)、コンデスーヨス(Condesuyos)、アリカ(Arica)の6地方(provincia)からなった〕。副王テオドロ・デ・クロイクス(Teodoro de Croix.在位1784-1790)の統治期であった1784年7月7日、モケグア地方はアレキパのインテンデシア〔Intendencia de Arequipa. アレキパのインテンデンシアはアレキパ、カマナ、コンデスーヨス、カイリョマ(コリャガス)、モケグア、アリカ、タラパカの地区(partidos)からなった〕に属するモケグア地区(Partido de Moquegua)」に改変される(地図2参照。人口構成は第2表参照)。モケグア地区はスペイン人のスブデレガード(subdelegado、監察官代理。行政、徴税、司法、公安の各権限を与えられていた)

[17] 1613年10月、ペルー副王モンテスクラーロス侯（Juan de Mendoza y Luna, Marquéz de Montesclaros. 在位1607-1615）はクスコ司教区を分割し、それまでクスコ司教区に含まれていたワマンガとアレキパ地域をそれぞれ司教区として独立させた。

地図２　18世紀後期アレキパのインテンデンシア




出所：Kendall W.Brown,*Bourbones and Brandy Imperial Reform in Eighteenth- Century Arequipa*(Albuquerque: University of New Mexico Press, 1986),p.9.

の管轄するところとなった[18]。

## ２．モケグア地域におけるぶどう酒とその蒸留酒アグアルディエンテの生産

現モケグア県はペルーで３番目に小さな県である。太平洋沿岸部の砂漠地帯を含む。火山や地震、変わりやすい流量の川をもつ地域である。砂漠からそう遠くない場所で肥沃な渓谷に出くわす。そこでは現在もブドウをはじめアボガドやオリーブといった美味な果物

[18] Brown(1986),p.14,p.19,p.22,p.150./ Polvarini de Reyes,*op.cit.*,p.460./ 拙著『トゥパック・アマルの反乱に関する研究―その社会経済史的背景の考察―』（神戸商科大学経済研究所、1995 年）、102-103 頁、294-295 頁。/ クライン、前掲書、130-134 頁。アレキパの初代インテンデンテのホセ・メネンデス・エスカラダ（José Menéndez Escalada. 在位 1784-85）の年俸は 6000 ペソ。かつてのコレヒドールのそれが 3000 ペソであったことを想起すると２倍である。またモケグア地域４教区〔doctrinas. オマテ（Omate）、トラタ、プキナ（Puquina）、イチューニャ〕のエンコメンデーロ（や権力者）や原住民カシケの詳細、人口構成、財産等についてはその一端が知られている。Cañedo-Argüelles,*op.cit.*,p.32,pp.46-48,pp.57-58,p.61,p.67.

第２表　1792年、アレキパのインテンデンシアに於ける人口構成（単位：人）

| | スペイン人 | | メスティソ | | 原住民 | | ムラート（自由民） | | ムラート（奴隷） | | 黒人（自由民） | | 黒人（奴隷） | | 合　計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 男性 | 女性 | 男性 | 女性 | 男性 | 女性 | 男性 | 女性 | 男性 | 女性 | 男性 | 女性 | 男性 | 女性 | |
| アレキパ | 12,718 | 10,164 | 2,781 | 2,447 | 2,810 | 3,062 | 888 | 875 | 298 | 233 | 308 | 295 | 424 | 327 | 37,630 |
| モケグア | 2,716 | 2,880 | 1,346 | 1,570 | 9,512 | 8,364 | 292 | 385 | 235 | 329 | 54 | 156 | 567 | 395 | 28,801 |
| アリカ | 759 | 826 | 948 | 1,029 | 6,367 | 6,503 | 443 | 443 | 241 | 181 | 86 | 13 | 258 | 215 | 18,312 |
| タラパカ | 229 | 280 | 628 | 572 | 2,613 | 2,793 | 240 | 282 | 28 | 27 | 2 | 4 | 79 | 119 | 7,896 |
| カイリョマ | 117 | 95 | 892 | 525 | 4,930 | 6,475 | 202 | 133 | 6 | 6 | — | — | 7 | 10 | 13,398 |
| コンデスーヨス | 2,275 | 1,388 | 2,154 | 2,204 | 5,767 | 6,244 | 23 | 11 | 13 | 8 | — | — | 12 | 11 | 20,110 |
| カマナ | 2,260 | 2,347 | 927 | 835 | 610 | 401 | 958 | 971 | 210 | 155 | 96 | 60 | 518 | 346 | 10,694 |
| 合　計 | 21,074 | 17,980 | 9,676 | 9,182 | 32,609 | 33,842 | 3,046 | 3,100 | 1,031 | 939 | 546 | 528 | 1,865 | 1,423 | 136,841 |

出所：Brown, *op.cit.*, pp.222-223.

が育つ。

アレキパ地方のビトル谷にブドウ園が出現しぶどう酒が造られはじめたのは1555年であった。モケグア谷の場合は1626年からブドウ園が営まれぶどう酒の生産が始まったといわれている。17世紀後半には早くもアルティプラノの代表的な都市、とくにポトシ、ラパス、クスコ市などにぶどう酒を送るようになっていた。18世紀初頭（1701年）、ぶどう酒の蒸留酒であるアグアルディエンテの生産が始まった。この頃からモケグア地方はビトル地域と並んでブドウ栽培の中心地となった。1783年にモケグア地域（以下、「モケグア」と略称する。「モケグア」は、特にことわりがない限り「モケグア地域」を指すものとする）には189人のブドウ園主（アセンダード）がいたという[19]。

ブドウ栽培とぶどう酒醸造業はモケグアの沿岸部から山岳部の渓谷地帯に拡大した。アグアルディエンテの商品価値が高まった理由は、アンデス高地の寒冷な地域でアルコール度の高い蒸留酒が好評を博したためである。モケグアのアシエンダや醸造所ではぶどう酒の生産が減少していき、これにかわってアグアルディエンテの生産量が著しく増加していった。地方税関の記録から、膨大な量のアグアルディエンテがアシエンダで生産されてい

[19] Brown(1986),pp.25-27,p.29,p.40.

たことがわかっている[20]。

よく知られたブドウ・アシエンダとしてはロクンビーリャ（Locumbilla）、チンバ（Chimba）、ヤラビコ（Yaravico）、サント・ドミンゴ（Santo Domingo）など、およそ15の中規模アシエンダが知られる。それらは、1814年に当地を巡察したアントニオ・ペレイラ・イ・ルイス（Antonio Pereyra y Luis）によって記録されている[21]。

近年に行われた考古学上の発掘調査では、オスモレ川（río Osmore）中間渓谷の28キロにおよぶ一帯に存在した130の醸造所の実態が報告されている。アシエンダと醸造所は川の両岸にあったことや、灌漑をはじめブドウの木の育成方法についても報告されている。モケグアのアシエンダの大半はわりあい小規模であり可耕地が不足気味であったという[22]。

## Ⅱ　モケグア産アグアルディエンテの流通

18世紀においてモケグア産アグアルディエンテ（ぶどう酒を含む）の供給先はアルトペルーに広がっていた。アグアルディエンテはまずもってティティカカ湖岸のチュクィート地方に運ばれた。そこからは新たな荷役用ラバの集団がラパス、コチャバンバ、オルロ、ポトシに商品を運んだ。最大の供給地は鉱業の中心地であるポトシであった。ポトシは、18世紀はもとより19世紀を通じても食品や飲料、コカの葉などを求めていた[23]。モケグア税関（la Aduana de Moquegua）の新税帳簿を分析するとアグアルディエンテの供給先や供給量が判明する。ポルバリーニ・デ・レイエスの研究によると、その供給ルートや供給地は多岐にわたっている。とはいえ、供給地は大小合わせてモケグアとポトシを結ぶルート上に点在していることがわかる[24]。

### １．モケグア産アグアルディエンテの主たる送付先と「新税」課税

モケグア産アグアルディエンテの供給先およそ200か所のうちのわずか10か所に、送付された蒸留酒全体の80％が集中していた。蒸留酒を受けとった10都市は第１表の如くであった。モケグア産アグアルディエンテの送付先は全面的にアルトペルーであった。そのうちの上位３位であるポトシ、ラパス、オルロ３都市への提供量を合計すると、その割合は90％を占めている[25]。次に、アレキパのインテンデンシアの主要産地からポトシに供給さ

[20] *Ibid*.,p.86.
[21] Polvarini de Reyes,*op.cit*.,pp.461-462.
[22] *Ibid*.,p.462,pp.484-486.
[23] *Ibid*.,p.463.
[24] *Ibid*.,p.464.
[25] 1786年おけるモケグア産アグアルディエンテの供給先を考察したケンダル・ブラウンの研究がある。4位を現スクレ（Charcasと記載されている）、5位をパリア（Paría）が占めているものの、第１表と大差はない。上位３位は第１表と同じ順位である。詳しくは、Brown(1986),p.79. 参照。

第３表　アレキパのインテンデンシアの主要産地からポトシに供給されたアグアルディエンテ

| 年 | モケグアから（単位:キンタル） | アレキパから（単位:キンタル） | ロクンバから（単位:キンタル） | ポトシでの価格（単位：ペソ） 上限 | 下限 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1784 | 6,854 | 140 | 766 | 26 | 24 |
| 1785 | 6,546 | 75 | 856 | 24 | 22 |
| 1786 | 9,246 | 23 | 1,372 | 24 | 22 |
| 1787 | 10,035 | 90 | 1,115 | 20 | 18 |
| 1788 | 9,532 | - | 645 | 18 | 17 |
| 1789 | 9,899 | - | 1,263 | 18 | 17 |
| 1790 | 10,8547 | - | 1,263 | 18 | 17 |
| 1791 | 12,466 | - | 1,467 | 22 | 19 |
| 1792 | 9,831 | 207 | 1,822 | 24 | 20 |
| 1793 | 9,900 | - | 949 | 22 | 20 |
| 1794 | 12,267 | 36 | 1,433 | 28 | 16 |
| 1895 | 13,431 | 115 | 1,802 | 18 | 16 |

出所：Brown,*op.cit.*,p.80.

れたアグアルディエンテの分量を示したものが第３表である。これをみると、モケグアからの分量がとくに大きな割合を示していることがわかる。

ところで、こうしたペルー副王領とラプラタ副王領間に交易が行われていること自体、行政機構改革の結果出現したラプラタ副王領の自立化をめざすというスペイン王権の方針と矛盾している。1776年のラプラタ副王領の新設を契機に王室は、ポトシ銀山のあるアルトペルーの管轄を、従来のペルー副王領から切り離し、新副王領の傘下に移行させたが、この措置はペルー副王領にとって政治的にアルトペルーの喪失を意味した。さらに王室は、ペルー副王領とアルトペルー間の通商を禁止する旨の命令を出したから、両副王領間の交易は事実上ストップしたはずなのである。にもかかわらず、モケグア産アグアルディエンテのアルトペルーへの送付のケースをみる限り、ペルー副王領とアルトペルー間の通商は依然として続いていた[26]。この事実は何を物語るのか？そこで考慮されるのが、ブルボン改革のもう一つの重要項目である「財政政策（＝増税政策）」の優先である。すなわちモケグア産アグアルディエンテの流通に関する限り、スペイン王室は行政機構の改革よりも増税政策の方を優先させていたことが判明する。そしてこのことは、ブルボン改革が一枚岩的に実施されてはいなかったことを物語っているのである。

ブルボン改革における「財政政策（＝増税政策）」は、植民地経済から最大限の国庫（税金）を引き出すべく日増しに厳密なものとなった。モケグア地域のアグアルディエンテの市場

[26] ラプラタ副王領の初代副王ペドロ・デ・セバーリョス（Pedro de Ceballos）は就任直後、アルトペルーからペルー副王領への鋳造されていない銀塊の提供を禁止する命令を下した。このことは、アレキパ地域のぶどう酒、アグアルディエンテの通商にとって脅威となった。しかしやがてこの禁止令が解かれると、通商にはほとんど影響しなかったという。*Ibid.*,p.149.

価格はキンタル当り８ペソであり、「12.5％」の新税[27]によって、キンタル当り１ペソ（un peso fuerte）が徴収された。これは商品価格の８分の１が税として課せられたことを意味する。この徴税の考えはわりあい早くから存在した。1740年にアグアルディエンテへの課税が決定されたけれども、その実行は1777年まで延期され、1777年から「新税」の名で徴収されるようになった[28]。モケグアのアグアルディエンテに課せられた「新税」台帳の記録を見ると、少なくとも1778年から「12.5％」の課税がなされている。この年、新税として2578ペソ１レアルがアレキパ財務府に収められた[29]。しかし徴税はこれにとどまらない。さらに「６％」の販売税が課せられたからである。

ここで、新税ならびに販売税支払いの実態を詳しくみておきたい。まずもって蒸留酒製造業者はアグアルディエンテを販売する時点で、商品価格を決め、その「12.5％」をモケグア財務府に支払わなければならなかった。輸送業者（「商人」といってもいい。「輸送業者」と「商人」の判別は曖昧である）が出荷物を受け取ったさい、モケグア財務府の税官吏は新税の納税証書（guía）を輸送業者（商人）に渡した。この納税証書は、輸送業者が運んできたアグアルディエンテの商品価格を正確に示していた。輸送業者はアルトペルーの各市場に到着すると、アグアルディエンテの商品価格に基づき、「６％」の販売税を現地の財務府に支払わなければならなかった（輸送業者が商売を完了して帰郷すると、販売税完済をモケグア財務府に報告しなければならなかった）[30]。

修道会はこれらの税金をすべて免除されていた。しかしスペイン王室によるイエズス会の新大陸からの一斉追放（1767年）とそのアシエンダ（大農園）の没収、俗人への売却は、国庫収入の増加をもたらした[31]。1780年に起きたアレキパ蜂起やトゥパック・アマルの反乱は、王権によって課せられた税金に反対する立場からの抗議の声でもあった。生産者も商人もたえず不平・不満を表明していた。しかし他方で、ペルー副王領のブドウ園主・醸造業者・商人は、ヨーロッパにおけるスペインがらみの戦争の、また18世紀末から19世紀初めにかけての新大陸植民地での諸反乱鎮圧の財源提供者でもあった。さらにヌエバ・グラナダ（Nueva Granada.パナマ、キト、サンタフェのアウディエンシアからなる）やリオ・デ・ラ・プラタ（Río de la plata）を王権が統治するうえでその補佐役でもあった[32]。そこには厳

27 植民地大臣ホセ・デ・ガルベス（José de Gálvez）の命令により創出された税。拙著、163頁。/O'Phelan Godoy(1985),pp.164-165,p.168,p.180.

28 Brown(1986),pp.52-53.

29 Polvarini de Reyes,*op.cit.*,pp.468-469.

30 Brown(1986),p.78. ラバ追い人（輸送業者・商人）がアルトペルーに行く途中で商品の一部を売却した場合は、当売却地で入手した販売税支払い領収書を提示することが求められた。

31 アレキパ地域の場合、マヘス谷のサカイ・ラ・グランデ（Sacay la Grande）を筆頭にサンハビエル（San Javier）、グアサカチェ（Guasacache）等のイエズス会経営アシエンダの没収が想起される。サカイ・ラ・グランデのブドウ園は約18万ペソ、サンハビエル農場は約14.5万ペソ、グアサカチェ農場は９万ペソ余りでそれぞれ売却された。アレキパ地域で没収されたイエズス会の不動産（店舗、製粉所、旅館を含む）総額は552,614ペソに上ったといわれている。*Ibid.*,p.141.

32 Polvarini de Reyes,*op.cit.*, P.470./その他、José Antonio Vaca de Osma, *Carlos III*(Madrid:Ediciones RIALP,S.A.,2005),p.271. 参照。

然たる二律背反の実情が伺われるのである。

## ２．モケグア産の酒類（ぶどう酒・アグアルディエンテ）の流通

酒類流通の様子のひとこまを17世紀に遡ってみてみよう。アルティプラノの原住民、とくにチュクィート地方の原住民がモケグアのぶどう酒をシエラに運んでいたことを先に述べた。チュクィート地方以外にもパカヘス地方（Provincia de Pacajes）やオマスーヨス地方（Provincia de Omasuyos）のアイマラのカシケの多くがその仕事に従事していた。とくにラレカハ（Larecaja）やシカシカ（Sicasica）の渓谷部にいたカシケである。彼らはモケグア（やアレキパ）の産地へ買い付けによく出かけた。そして、ポトシやラパス、オルロの市場へ、また自らの共同体にぶどう酒を輸送した。彼らはまた、クスコやラパス・ユンガスのソンコ（＝ソンゴ）（Sonco,Songo）へコカの葉を買い付けるために赴いた[33]。ヘスス・デ・マチャカ（Jesús de Machaca）、コパカバーナ（Copacabana）、グアリナ（Guarina）などの村のカシケもまた同様の商売に従事していた[34]。モケグアのぶどう酒は17世紀を通じてアルトペルー市場でたいへん有名になった。パカヘス地方ヘスス・デ・マチャカのカシケのガブリエル・フェルナンデス・グアラチ（Gabriel Fernández Guarachi）は、ポトシ銀山のミタに関するカピタン・ヘネラル・デ・ラ・ミタ（capitán general de la mita.ミタ行政官）[35]であり、アルトペルーの商業に従事し、ぶどう酒を商った。リャマ2520頭を所有しており、うち1000頭をモケグア谷のぶどう酒の輸送にあてていた。彼はポトシ市にぶどう酒を保管するための酒倉を持っており、甥のペドロ・フェルナンデス・グアラチ（Pedro Fernández Guarachi）を通じてぶどう酒をポトシで販売した。1673年にペドロはぶどう酒を売って1650ペソを得たという。1676年にペドロは1000頭のリャマとぶどう酒800ボティハを抵当に入れて借りた金額2700ペソをルイス・チリノス・デ・ゴドイ（Luis Chirinos de Godoy）に返済した。また同年８月にはポトシ市の住民アロンソ・マルティン・モンテス（Alonso Martín Montes）に別の金額1000ペソを返済した。さらに同年９月にはチャリャナ村（Challana.ラパス・ユンガスに位置する）の富裕な司祭フアン・デ・エレディア（Juan de Heredia）に1260ペソ（これは「1560ペソ」の誤りと思われる）を支払っている。この金額は、コカの葉260かご（コカの葉のかご単価は６ペソ）を購入した代金である。しばらくして彼は、チュルマニ（Chulumani）村に属するチャペ（Chape）村にあるティキンパヤ（Tiquimpaya）とよばれるコカのアシエンダをおよそ1600ペソで手に入れた。しかしモ

33 クスコのコカ産地はパウカルタンボ（Paucartambo）。ソンコ以外にチャリャナ（Challana）、チャカパ（Chacapa）が有名。これらの村はシエラの原住民の逃亡先でもあった。

34 Choque Canqui(1987),*op.cit.*,p.358,pp.360-361./Assadourian(1982),*op.cit.*,p.190.

35 グアラチは1620年から1673年にかけて10回以上にわたってパカヘス地方のカピタン・ヘネラル・デ・ラ・ミタを務めた。Roberto Choque Canqui, “Historia.” en *La cosmovisión aymara*, por Hans van den Berg y Norbert Schiffers (compiladores)(La Paz: UCB/hisbol,1992),p.69.

ケグア、ロクンバ、アレキパの渓谷部を旅行したさい突然死した[36]。未亡人となったフアナ・キスペ・シサ（Juana Quispe Sisa ）は夫ペドロに替わってぶどう酒の取引を継承した。1684年にアントニオ・メヒア（Antonio Mexía.ラパス市の住民）に600ボティハのぶどう酒を渡す契約を結んだ。さらに400ボティハを提供した。合計1000ボティハのぶどう酒の価格は6000ペソであったという。ぶどう酒単価６ペソは当地では固定していたといえる。

パカヘス地方カキャビリ（Caquiaviri）村のカシケであったフアン・チョケ・グアマン（Juan Choque Guaman）は、モケグア産のぶどう酒257ボティハほかを、1187頭のリャマと18頭のラバを使ってシエラへ輸送したという。ディエゴ・シルパ（Diego Sirpa）は、ビアチャ（Viacha）村のカシケであったクリストバル・ニナ（Cristóbal Nina）とともに商業に従事した。1655年に亡くなる前、アレキパ産のぶどう酒2000ボティハをポトシに送っていた。当時のポトシ市場においてぶどう酒は最も人気のある商品の一つであった[37]。

以上の事例から共通点は、北はチュクィート地方から南はパカヘス地方やシカシカ地方に至る地域にいた原住民カシケがモケグア（やアレキパ）産の酒類の取引に深く関与していたことである。ほかに彼らはラパス・ユンガス産のコカの取引にも従事した。ぶどう酒とコカという、アルトペルーの市場において絶大の人気を誇った商品の取引に関係していたのであった。これらの商品をいったんアルティプラノに集め、その後、ポトシ、ラパス、オルロ等の市場に提供したといってよいだろう。こうした状況は、ぶどう酒の時代からアグアルディエンテが主流となる18世紀以降においても変わることはなかった。モケグア地域とアルトペルー地域とのこうした関係は、「垂直統御」にもとづく単純な経済決定論の観点からだけでは説明しきれない。つまり両者間における人の移動や交易を考える上で文化の基層があるように思われる。第一候補に挙げられるのがティワナク文化圏という基層である[38]。

ところで、ぶどう酒とコカの大がかりな卸売り商となったアルティプラノの有力カシケたちは、インディアス法規集の法令（las leyes de recopilación de Indias）に基づく特恵によってアルカバラ（販売税）を支払っていなかった可能性が大きい[39]。

アグアルディエンテに話を戻そう。1776年のアルカバラ税率の「６％」への値上げに伴い植民地経済のさまざまな部門から異議申し立ての声が上がった。そうした中で、各都市に設けられた王立税関は、入ってきた商品の価格に基づき、アルカバラの額を計算し課税

36 Choque Canqui(1987),*op.cit.*,pp.361-363.

37 *Ibid.*,p.363.

38 アンデス考古学者の関雄二は、「ティワナク社会の中核地周辺の集団は……ペルー南海岸のモケグア谷中流域で飛び地経営を行い……」と述べている。関、前掲論文、203 頁。

39 カシケによるアルカバラの支払いは、場合によって異なり断定しがたい。例えば、ティワナク村のカシケで商人のホセフ・カンキ（Joseph Canqui）はラパス市にぶどう酒を運んだおりアルカバラの支払いを要求されたという。しかしアルカバラを支払わなかったケースもある。1730 年にマテオ・アレハンドロ（Mateo Alejandro. チャリャパタの原住民）、バルタサル・チパナ（Baltazar Chipana）らは、ポトシに 96 頭の子羊、38 頭の雄羊、152 かごのコカの葉を運んだが、「カシケゆえに徴収されなかった」と証言している。*Ibid.*,pp.373-374.

第４表　1793年のポトシ市場におけるアグアルディエンテの提供先構成
（価格は新税・納税証書（guía）に基づく。単位：ペソ）

| 新税・納税証書（guía）の作成地 | 価格（単位：ペソ） | 全体に占める割合い（単位：％） |
|---|---|---|
| モケグア | 212,859 | 82.0 |
| ロクンバ | 13,248 | 5.0 |
| ロクンバ-モケグア | 6,860 | 3.0 |
| イラバヤ-モケグア | 2,820 | 1.0 |
| イラバヤ | 2,400 | 0.9 |
| アレキパ | 2,280 | 0.9 |
| タクナ | 63 | 0.0 |
| シンティ | 13,155 | 5.0 |
| シカシカ | 2,235 | 0.8 |
| サルタ | 1,890 | 0.7 |
| フフイ | 512 | 0.2 |
| トゥピサ | 442 | 0.1 |
| 納税証書なし | 192 | 0.07 |
| 合 計 | 258,954 | 100.00 |

出所：Enrique Tandeter,Wilma Milletich, Ma.Matilde Ollier,Beatriz Ruibal, “El mercado de Potosí a fines del siglo XVIII.” en *La participación indígena en los mercados surandinos, estrategias y reproducción social siglos XVI a XX* por compiladores de Olivia Harris,Brooke Larson,Enrique Tandeter(La Paz:CERES/SSRC,1987),p.415.

した。商品の販売が行われる以前に、輸送者にその支払いを命じた。そのさい、輸送者の名前、入荷の日付、当該商品の入手場所、証書（guía）記録、発送地、６％の課税証書、商品名とその分量等が記録された[40]。ポトシ税関の記録によると、1793年にポトシではアグアルディエンテとコカの合計額が、現地（地元）産商品全体の価格の60％近くを占めていた。ポトシに流入した現地産商品を検討すると、1733年に比べて1793年ではアグアルディエンテとコカの占める割合が、ともに著しく伸びていることがわかる。アグアルディエンテは21.4％から30.6％へ、コカは9.0％から27.8％へとそれぞれ上昇している。一方、この時期のぶどう酒の占有率を見ると著しく低い。1733年と1793年との比較では、5.1％から1.7％へとさらに減少の一途をたどっていた。前世紀に繁栄をきわめたぶどう酒の商品価値は18世紀になると著しく低下し、1701年から生産が始まったアグアルディエンテがぶどう酒に取って代わったことが判明する。アグアルディエンテへの期待、その商品価値は驚嘆に値する。当然ながら、現地産商品の中で注目が集まるアグアルディエンテとコカにたいする王権の期待がいちだんとふくらんだことは想像に難くない。最大のアルカバラ徴収源だったからである[41]。

1793年のポトシ市場におけるアグアルディエンテの提供先構成を示す記録が残されてい

40 Tandeter,Milletich,Ollier,Ruibal,*op.cit.*,p.380.
41 *Ibid.*,p.395.pp.398-399.

る（第４表）。これをみると、モケグア産のものが全体の82％を占めていたことがわかる。モケグアとポトシの結びつきがいかに大きいものであったかが判明する。

モケグアのアグアルディエンテはリオ・デ・ラ・プラタの辺境にまでも到着したが、その対価を見てみよう。アルトペルーからモケグアには、家畜類（リャマ・アルパカ、ラバなど。獣毛を含む）が運ばれたことは間違いない。ほかに、馬のための頭絡、馬勒、鞍、粗布、革敷き、木製のあぶみ、鞍かばん、銅や銀製のはみ受け、毛布、羊毛の織物、アニス、カカオ、コーヒー、干し肉、タマリンド、穀物、落花生などが流れたとの記録がある。アグアルディエンテの生産に不可欠の平鍋、あく取り用の網じゃくし、銅製のシチュー鍋・かめが、ラパスから運ばれた。ラパスではこうした金属が加工されていたからである。見返り品の一部はイロ港にまで達した。（アルトペルー産の品がイロ港から海上を北に流れることもあった。主要港であるピスコ港を経由することなしにイロ港は太平洋沿岸部の交易拠点としての役割を担ったのである）[42]。

最後に、アグアルディエンテを含む物資の輸送手段にふれておく。18世紀になると、輸送の主役はリャマからラバに替わっていた。ラバによる輸送は輸送業者に前もっての投資を要求した[43]。モケグアの地主によるラバの賃貸を示した記録がある。1781年11月23日から1782年３月29日にかけて237頭のラバが賃貸しされ、合計2647ペソ2.5レアルが支払われている。今後、ラバの販売価格はもとより、モケグア―ポトシ間の行程におけるラバの賃貸料などを調査することで、輸送の実態が明らかとなろう[44]。

## Ⅲ　結語

ブルボン朝による財政改革の一環として王室財源確保のために新大陸植民地に課せられた税金の種類、税率は多岐にわたった。徴税面でのさまざまな工夫や脱税の取り締まり強化によって徴税額の上昇がはかられた。しかしこのことは伝統的な植民地経済の土台を揺り動かしたため、反乱蜂起発生の原因となった。植民地経済のあらゆる部門に課税対象が広げられた。アグアルディエンテに課せられた12.5％の新税はその端的なケースである。モケグア産アグアルディエンテの提供先はもっぱらアルトペルー、とくにポトシであった。1776年の行政機構の改革によってアルトペルーはペルー副王領の管轄下から外され、新たに設けられたラプラタ副王領傘下に移行したにも拘わらず、アグアルディエンテの流通に関する限り、財政政策が優先されたことが見て取れる。徴税には地域主義（regionalismo）の傾向が強く見られたといえる。しかしながら、国庫収入の増加をめざすブルボン朝の財

42 Polvarini de Reyes,*op.cit.*,p.464.
43 *Ibid.*,p.465.
44 *Ibid.*,pp.470-471.

政政策の理念と植民地経済の実情との間には乖離があった。（このことがアレキパ市における市民蜂起の直接的な原因となったことは既に別稿[45]で述べた。）

モケグア産アグアルディエンテのアルトペルーにおける流通は19世紀に入っても続いた。財政改革は地域主義を強調するという独自性を有しており、その結果、植民地社会とスペイン王権との間に入った亀裂は大きくなる一方であった。そしてこのことは各地域における政治経済体制の安定を失わせる結果となった。新大陸植民地のスペインからの独立が間近に迫っていた。

[45] 拙稿「18 世紀ペルーにおけるアレキパ蜂起の社会経済的背景」『COSMICA』XXII、京都外国語大学、1993 年、1-27 頁。/ 拙著、第 3 章（101-140 頁）。

## 参考文献

クライン、ハーバート・S・著(星野靖子訳)『ボリビアの歴史』(創土社、2011年)。

関雄二「チリパからティワナクへ」『ボリビアを知るための68章』(真鍋周三編著)(明石書店、2006年)、200-203頁。

拙稿「18世紀ペルーにおけるアレキパ蜂起の社会経済的背景」『COSMICA』XXII、京都外国語大学、1993年、1-27頁。

拙著『トゥパック・アマルの反乱に関する研究―その社会経済史的背景の考察―』(神戸商科大学経済研究所、1995年)。

拙稿「植民地時代前半期のポトシ銀山をめぐる社会経済史研究―ポトシ市場経済圏の形成―(前編)」『京都ラテンアメリカ研究所紀要』No.11、京都外国語大学、2011年、57-84頁。

Acevedo,Edberto Oscar,*Las intendencias altoperuanas en el virreinato del Río de la Plata*(Buenos Aires:Academia Nacional de la Historia,1992).

Assadourian,Carlos Sempat,*El sistema de la economía colonial,mercado interno,regiones y espacio económico*(Lima:Instituto de Estudios Peruanos =IEP,1982).

Brown, Kendall W.,*Bourbones and Brandy Imperial Reform in Eighteenth- Century Arequipa*(Albuquerque:University of New Mexico Press,1986).

Brown, Kendall W.,*Borbones y aguardiente la reforma imperial en el sur peruano: Arequipa en vísperas de la Independencia*(Lima:Banco Central de Reserva del Perú,IEP,2008).

Cañedo-Argüelles Fábrega, Teresa(Coord.),*Al sur del margen avatares y límites de una región postergada Moquegua (Perú)*(Madrid:Consejo Superior de Investigaciones Científicas,IEP,2004).

Choque Canqui,Roberto,”Los caciques aymaras y el comercio en el Alto Perú.”en *La participación indígena en los mercados surandinos, estrategias y reproducción social siglos XVI a XX*,por compiladores de Olivia Harris,Brooke Larson,Enrique Tandeter(La Paz:CERES/SSRC,1987), pp.357-377.

Choque Canqui,Roberto, “Historia.”en *La cosmovisión aymara*,por Hans van den Berg y Norbert Schiffers (compiladores)(La Paz:UCB/hisbol,1992), pp.59-80.

Fisher,John, “Estructuras comerciales en el mundo hispánico y el reformismo borbónico.”en *El reformismo borbónico*, ed.por Agustín Guimerá(Madrid: Alianza Editorial,1996),pp.109-122.

Guimerá,Agustín(ed.),*El reformismo borbónico*(Madrid:Alianza Editorial, 1996).

Lazo García,Carlos, “Fases de la reforma borbónica.Perú:1728-1800.”en *Obras escogidas de Carlos Laso García Tomo I historia de la economía colonial*(Lima:Fondo Editorial del Pedagógico San Marcos,Instituto de Ciencias y Humanidades,2006),pp.157-183.

Miguel Glave,Luis, “Trajines, abastecimiento y mercado:Potosí,siglos XVI-XVII.”en *Potosí plata para Europa*, por compilador de Juan Marchena Fernández(Sevilla:Universidad de Sevilla,Fundación El Monte,2000),pp.155-174.

Mujica B.,Elías, “La integración sur andina durante el período Tiwanaku.”en *La integración surandina cinco siglos después*,por compiladores:Xavier Albó,María Inés Arratia,Jorge Hidalgo,Lautaro Núñez,Agustín Llagostera,María Isabel Remy,Bruno Revesz(Cuzco:Centro de Estudios Regionales Andinos “Bartolomé de Las Casas”,1996),pp.81-115.

O’Phelan Godoy,Scarlett, “Las reformas fiscales borbónicas y su impacto en la sociedad colonial del Bajo y el Alto Perú.”*Historia y Cultura*(Revista del Museo Nacional de Historia),No.16,

Lima,1983,pp.113-128.

Polvarini de Reyes, Alicia, “Mercado interno y región Moquegua y las rutas del aguardiente de uva en los siglos XVIII y XIX.” en *Historia compartidas economía, sociedad y poder, siglos XVI-XX*, por editores de Margarita Guerra Martiniere y otros(Lima:Pontificia Universidad Católica del Perú, Instituto Riva-Agüero,2007),pp.455-491.

Roca,José Luis,*Ni con Lima ni con Buenos Aires la formación de un estado nacional en Charcas*(La Paz:IFEA,Plural Editores,2007).

Santamaría,Daniel J.,” Intercambios comerciales internos en el Alto Perú colonial tardío.” en *Revista Complutense de Historia de América*,Vol.22,1996,pp.239-273.

Santamaría,Daniel J., “La participación indígena en la producción y comercio de coca, Alto Perú 1780-1810.” *La Participación indígena en los mercados surandinos estrategias y reproducción social siglos XVI a XX*, por Olivia Harris, Brooke Larson, Enrique Tandeter(compiladores) (La Paz:Centro de Estudios de la Realidad Económica y Social,1987),pp.425-444.

Tandeter,Enrique,Wilma Milletich,Ma.Matilde Ollier,Beatriz Ruibal, “El mercado de Potosí a fines del siglo XVIII.” en *La participación indígena en los mercados surandinos, estrategias y reproducción social siglos XVI a XX*, por compiladores de Olivia Harris,Brooke Larson,Enrique Tandeter(La Paz:CERES/SSRC,1987),pp.379-424.

Torres Ramirez,Biblano,Javier Ortiz de la Tabla(compiladores),*Reglameno para el Comercio Libre 1778*(Sevilla:Facultad de Filosofía y Letras de la Universidad de Sevilla,Escuela de Estudios Hispano-Americanos-C.S.I.C.,1978).

Vaca de Osma,José Antonio,*Carlos III*(Madrid:Ediciones RIALP,2005).

Vallejos,Lolenzo Huertas, “Introducción al estudio de la producción de vinos y aguardientes en Ica-siglos XVI al XVIII.” *Historia y Cultura*(Revista del Museo Nacional de Historia),No.21,Lima,1991-1992,pp.161-217.